

---

# サイコロジー倶楽部

榎 麻容

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サイコロジー 倉楽部

### 【Zコード】

Z0563D

### 【作者名】

檻 麻容

### 【あらすじ】

『サイコロジー 倉楽部』は特別な心療内科。医者は一人で、他は『部員』。病院ではなく倉楽部。

その倉楽部では、『部員』の特別な能力が人の心を癒していった。医師であり、部長でもある泉里が、運命を導いていく。

【ミッキング・リンク（アナザーストーリー）】を先に読んでいたいた方がわかりやすいと思います。

## 第1話・仮想幻視（カソウゲンシ）

黒髪が印象的だった。

サラサラと揺れる髪は長くもなく短くもなく、ただ似合っている  
としか言いようがない。

前髪は少し長めで右に流れていって、それが自然に見えた。顔の造  
りが整つていて、目が逸らせない。

視覚が、奪われる。

「あなたが私を助けてくれるのですか？」

問いかけは浮くこともなく、受け止められた。

「君が望むなら」

自信を持つて言つているのではないことがわかった。本当に、『  
私が望む』ことをしたいという宣言だ。

だからこそ信じられる、不思議な言葉。

それが私とサイコロジー倶楽部の部員との出逢いだった。

\*

「『幻視夢景』が必要だと思つたの？」

隣に位置する部屋のマジックミラーから、一人の少年は診察の様  
子を見ていた。普段は待機室として使われる簡素な空間で、診察室  
の声は聞こえるが、待機室の声は決して聞こえない。この部屋の別  
名は看視室と呼ばれていた。患者の関係者が希望するときに使用し  
ている。

学則に縛られたような模範生徒の格好をした黒髪の少年、冥はミ  
ラーから視線を隣に立つ人物へと移した。強い意志のこもった瞳が  
人を捕らえる。きつちり着こなされた学ランは、冥を優等生に見せ  
ていた。

腕を組んだ姿勢で目だけを冥へと向けた泉里は、くせつ毛の淡い  
せんり

茶色の髪を軽く揺らし、首を傾げた。田は楽しそうに細められていく。

「やつだよ？」

肯定するも疑問形に語尾を上げたことに對し、冥は溜息を吐いた。曖昧な言葉は断定にはならない。

決定事項を提示するほど泉里は優しくなかつた。この場合、言葉に含まれているのは自己選択と考察だけで、つまりは「自分で考えろ」、ということだつた。

幻視夢景。今診察室にいる五月雨の治療方法を、泉里はその四文字で命名した。視覚を騙し、一時的に心身を回復させる方法で、それは夢のような景色であることから夢景と命名されたと一般には思われているが、泉里の意図はそつではないことを冥は知っていた。幻視は幻だから確実さを伴つてはいなくて、そこにあるのはただの願望だけだ。夢は見るだけで何も生みはしない。

「幻視夢景…五月雨は彼女に何を見せるんだろ？」

「彼女は見るべきなんだ。心に閉ざすべきではないものを多く閉ざしそぎて許容量がなくなつていてるから。それじゃあ望みは叶えられない。さあ、五月雨はどうするかな？」

コンツと軽くマジックミラーを叩いた泉里は、優しい眼差しで鏡の向こうにいる五月雨を見た。

サイコロジー俱楽部の部長である泉里は、俱楽部の中で唯一医師としての資格を持ち、部員の信頼や親愛を受けていた。部員は泉里の助けがあつたからこそ、今俱楽部にいる。

自分の持つ能力を正しく使い、人を救う方法。それは心療内科といふ医療機関に最も適していて、泉里は部員に価値を与えた。しかし、それだけではなく、泉里も救われたのは確かだつた。部員のほとんどは能力の影響で一人でいることが多く、「一人でいること」は良い思い出を与えはせず、反対に奪つてばかりいた。だからこそ、同じような能力を持つ者は側にいてほしいと互いに思える存在になつた。泉里にとつて部員は護るべき存在であり、仲間であり、家族

のようなものであり、かけがえのない友人だった。

その泉里の五月雨に向ける視線とは裏腹に、冥は少し不機嫌さを滲ませた視線をミラーの先へと向けた。

「なんで患者の僕に五月雨の治療を見せるの？」

「…もしかして妬いでる？ 君は五月雨の患者だからね。第三者の視点から見る良い機会だと思つて。今回君に対する治療はコレだよ。ちゃんと彼女の親族から許可は取つてある」

余裕の笑みを浮かべる泉里が示す先には、先程の音が聞こえたかのように五月雨が視線を向けていた。そしてゆっくりと口を動かすのを見て、泉里は笑みを深くした。読唇術に長けている泉里にとって読み取ることは簡単で、冥は自分で同じように口を動かし、理解しようとした。

唇五回の動きは読み取り易く。

冥は驚きで反応が遅れたが、少し赤みの差す頬を隠すように俯き、勢いよく鏡のカーテンを閉めた。

五月雨が口で作った無音の言葉は『せんり、めい』だった。

「…見えてないくせに」「

「気配でわかつたのかもね」

泉里がフフッと笑ったのに対し、冥は何とも言えないしかめ面を浮かべた。

## 治療と病称

「まずは自己紹介するね。僕は五月。<sup>わづき</sup> わかつてていると思つけど、ここでの医師は初めに会つた泉だけ。だから僕は『先生』じゃないから。あと君の名前は聞かないよ。ここには必要ないからね」

優しい表情で、緊張しないよう友達のように接してくれる五月と名乗った部員。医者ではないと言つたが、心の治療ができるからこの場所にいることは間違いない。

サイコロジー俱楽部は普通の心療内科ではない、と噂で知つていた。しかし、内容までは噂されていなかつたので、一瞬迷つた。迷つたのはここを選んだことに対してもなく、どこまで自分を話せるか、だ。

人には話せないことが一つはある。しかし、そんなレベルではない秘密を私は持つていて。知られることは世界の根源を表す、そんな大きさの秘密。しかし知られてしまつとしたら、それはあの人があれを望んだということだから。

「さて、と。君の症状はさつき聞いたからね……『<sup>ぶんべつけよつかいふかしありうつ</sup> 分別境界不可視症』といふことにしようか」

「『分別境界不可視症』？」

聞き慣れない単語を復唱した。

言葉の感じで意味はわかる。しかし病名としては不自然だつた。単語を並べただけのように感じるが、すんなりと受け入れることができる。耳に馴染んだ感触がするのは勘違いだとはわかるが、それ以上に安心する。

自分にピッタリとしすぎていた。

「本当にそんな病名が？　『じょうか』といふことは、作つたのですか？」

「スルトイね。そう、僕が作った名称だよ。ここではそれを『病称』と呼んでいる」

座り心地の良さそうな椅子に背を預けず、身を乗り出して語る姿勢は医師とは感じさせず、親しさだけを感じた。医師としての場所にいるにも拘らず、先入観なんてなく、友人と接しているかのような気楽さだった。

いつのまにか緊張は解け、そこにあるのは不思議な交流で、感じるはずのない空氣に戸惑い半分、妙に納得できた。

現実には存在しない、澄んだ音が耳を撫つた。

「何故、私のために病称を？」

「心の病気に名前が一つであるはずがないから。人それぞれ心は違うから。だから人によって僕たち部員は名前をつける。それがこの俱楽部のやり方だよ。普通の病院ではそんな余裕が無いから変に感じるかもね。おかしいと思う？」

「いいえ。とても…素敵だと思います」

本当にそう思えた。

自分だけにある固有の名称。それは自分の状態を明確に示していい。言葉に拘るなんていつもはしないはずなのに、今は拘りたかった。拘りたいのは、希望ではなく渴望で。

ふと、泉里の顔を思い出した。この場を用意したのは彼だ。彼らしいやり方に笑みが漏れる。

「よろしくお願ひします」

この人なら教えてくれると思った。忘れた意味、大切なものの認識の甘さが招いた自己嫌悪。

もう何一つとして見失いたくないと思つていてる自分が確かにここにいた。

\*

「『分別境界不可視症』…さすが五月雨」

「センスいいよな。冥には『増殖型不確定要素症候群』だつけるか？」

よく思いつくよな」

泉里と入れ替わるように部屋に現れた零は、ははっと笑って壁に背を預けた。冥はこの看護が自分への治療というのは強ち嘘ではないのかも知れない、と思った。しかし、全部が本当だとは思えない。天然の稻穂色の髪がサラリと流れ、嫌味なほどに整った顔に笑みを浮かべた零は冥の表情を窺つた。

零の治疗方法は視覚を使う点で似ていたが、決定的に質が違っていた。泉里が冥ではなく五月雨を選んだのは、今回は零の治療方法ではなく、五月雨の質が合ひすぎたからだった。

冥は無表情に零を見、溜息を吐いた。

「静ちゃん、暇なわけじゃないよね。早く部屋に戻つたら？」

静、という単語を強調して言つた冥に対し、零はあからさまに嫌悪の表情を浮かべた。静は零の俱楽部での名前、つまり『記号』でしかないのは冥がよく知つてることで、決して固有名詞にはなりえない名前だった。冥は『本当の名前』を知つているから、『記号』を使うのは嫌がらせになる。

「…うるさい。『静』は冥が使う名前じゃないだろ。五月雨を『五月』と言わないように、泉里を『泉』と言わないように。冥、泉里が何を言つたか知らないけど、この患者は気を付けた方がいい。君が今回ここにいる意味、わかつているなら余計にな」

「…うん、アリガト。泉里は直接には言わなかつたけど、僕がここにいる意味はわかつている。ただ、先が読めない分、不安定すぎて嫌なだけ。ごめん、八つ当たりして」

零は冥の無表情の中に、はつきりと謝罪をこめた表情を見つけた。それは親しい者にしかわからない、冥の感情で。

親しい者だけにわかる、冥の優しさだつた。

短期間で病気を完治させる俱楽部は、患者とは深く関わらないことが原則だった。多くて三回の治療で治す。そうでなければ能力は治療になりえない。能力は特別だからこそ、影響は少ない方が良

い。しかし冥は能力に影響するが、悪影響はなく、もう二ヶ月も俱楽部に通っていた。冥が本当に必要としているのは治療ではなく、交流だからだった。だから今、部員たちは冥を患者としてだけではなく、友人として接している。

「コンピューターを駆使する冥は、周囲には冷徹なように見える。しかし冥は機械に依存していなくて、いつも見ているのは機械ではなく人間だった。それは部員だけが知っている。冥も他の人に知つてもらおうとは思っていないこともあり、誤解は解けないまま放置されていた。

冥の病気。零が付けた病称は『不明瞭限界症』で、『不確定』が一番の鍵になっている。不確定要素は冥を不安定にさせ、心を蝕んでいく。

「不安定は冥の不安要素だからな。八つ当たりくらいで怒らない。…今回、辛い思いをするのはあの患者ではなく、冥かもしれない」零はそつと冥の肩に触れた。

冥は少し高い位置にある零の瞳を見、逸らそつとはしなかった。存在する感情は同情でも憐れみでもなく。

「ただ何かを護りたいという気持ちだけだった。

「わかってる。今、零がここにいる意味も」

少しだけ口元を緩めた冥に、零は優しく微笑んだ。

触れた指先から伝わるのは体温だけではなく。患者と医者という立場は関係なく、友人になったのは自然の成り行きだった。泉里と同様に、救われていたのは冥だけではなく、部員も影響していた。拒絶しない存在。それは希少で、時にとても必要とするものだった。

零はそっと手と下ろし、マジックミラーへと視線を向けた。

「五月雨、今回選ばれたのには意味はないんだ。そう、これは決まつていた」

## 不可視と同調

「まず一年前の記憶を全て開けようか。いる、いらないは関係なく全て。玩具箱を広げるよう」

顔の前で軽く手を叩かれた。

一瞬で目の前に青い景色が広がった。

それは遠い昔に見たような気がするのは気のせいでもなんでもなく。事実でしかないもので。

一年前からもう始まっていた不可視。景色の中にはいるはずの人がいながらが証明している。あの時辛かつたのは自分ではなく。同調できなかつたことに意味を見出せず、自分の無力を知つたのに。決して閉ざしてはいけなかつたのに。

「それは…誰？」

近くで聞こえる声。それは記憶を呼び起こし、深く沈んでいた。忘れていたワケではない。泉里を思い出せたのだから。ただ近くにいすぎたから、同一視してしまつていた。

彼女は別の個体なのに、同じと看做したための不可視。

原因がわかれば殻はすぐに破れるはずだつた。中にあるのは真実の言葉で。

「それは…私にとつての絶対的存在」

\*

「絶対的存在…？」

零が去つて一人きりになつた部屋の中で、冥は呟いた。引っ掛けたのはその単語に一つの鎖を感じたからだつた。戒めを嫌う冥は、言葉に表れる抑揚を敏感に感じる。だから、不安定なモノは不安要

素になりました。しかし、感じた鎖に不快感はなく、純粋な繫がりの  
ような感じを受けた。

冥は顎に手を当て、注意深く一人の様子を見た。共通している事  
象が多すぎた二人の感応は、異常に思えた。それは冥にだけわかる  
微妙な異常だつた。

突然、少女は糸の切れた人形のように倒れ込み、椅子から落ちそ  
うになつた。それを支えようとした五月雨は同時に頭を抱え込み、  
少女を体で受け止めた。冥は思わず鏡に手を当てた。無機質な鏡か  
ら伝わるのは冷たい感触だけだつた。

五月雨の反応が良かつたこともあり、二人に怪我はなかつた。冥  
は安心するも、何も出来なかつたことに対し、唇を噛んだ。

一枚の鏡で隔たれた空間は思ったよりも離れていて、見ているこ  
としかできない。鏡に当てた指に力が入つた。

「ここにいる意味なんて……！」

「あるわよ」

冥は動搖した。すぐに声がした方向へと視線を向けた。

隣には鏡の向こう側にいる少女と同じ顔の少女がいた。音もなく  
入ってきて、気配まで消している。思ったよりも近い距離だつた。  
少女の顔に浮かぶのは悲しそうな笑顔で。

少女は冥へと視線を移し、冥の手に触れ、いつの間にか力を入れ  
過ぎていて白くなつていた指をそつと包んだ。

「あの人も同調しちやつたのね。でも、それが良かつた」

凛と響く声に含まれているのは喜びだけで、二人を心配している  
様子はなかつた。それが冥を安心させ、硬くなつていた表情を緩め  
させた。

同じ顔を持つ双子の少女が片割れを信じるなら、それは絶対だ。  
冥が鏡へと視線を戻したとき、五月雨は一筋の涙を流していた。

「早く戻ってきて……樹里」

## 音と視覚

「お帰り、樹里」

隣の部屋から現れた樹音じゅねに対し、樹里は満面の笑みを浮かべた。そんな樹里の表情は珍しく、樹音も笑顔を返した。

同じ顔でもはつきりとわかる違いがある。

同じに見えて別個体である限り、同一視なんてできない。

樹音の差し出した手をしっかりと取り、樹里は立ち上がった。

「冥…」

座り込んだままの五月雨は、まだ少し痛む頭を右手で押さえながらも冥の存在を捕らえた。

視覚だけではなく、冥の存在を音で感じた。

それは双子の少女が影響していることが、今だから理解できた。看視室から聞こえない窓を叩く音が聞こえたのも、彼女の影響だった。五月雨は、先ほど同調して見た光景で、音を操る、二人で一対の翼のような存在がいることを知った。まだ、影響は残っている。冥の音が揺れていた。

「なんで悲しそうな顔を？」

「…何もできなかつたから。隣の部屋にいたのに見ているだけしかできなかつた。ここにいる意味なんて」

「あるつて言つたわよね？」

続く言葉を遮り、樹音は冥の方へと向かつた。樹音の後ろでは樹里が静かに微笑んでいる。

樹音は部屋に入つてこようとしている冥の腕を引いた。

前に重心が移動した冥は自然と部屋へと一步踏み出した。一度入つてしまえば、足は自然に動く。

「樹里と同調してしまつたとき、彼はあなたの名前を呟いたわ。それがこの世界と自分を繋ぐ一本の糸のように。あなたがいなかつたら多分、樹里も傷ついていたはずだから…してくれてありがとう」

「視覚なんて簡単に騙せる。だからこそ、視覚に頼らず本物を探すことには意義があるんだよ。偽物に意味はあっても価値はない。同調

した時、頼れたのは視覚ではなかつたから…ありがとう」

冥は樹音と五月雨、両方から感謝され、言葉を失つた。

ただ、いるだけでいい。そんな価値が自分にあるとは思えなかつた。

しかし、一人が救われたのは事実だつた。五月雨の閉ざされた世界の中で感じることが出来たのは冥の気配だけで、その名前こそが自我を保つ唯一の糸だつた。遠くに感じる泉里の気配なんかでは敵わない。音の影響が支配する。

そして、樹里も近くにいる樹音を感じ、同調している五月雨の負担が軽減したからこそ傷付かなかつた。冥がいたから救われたのは明らかだつた。

「そんなん…僕はみんなみたいに強くないのに」

「僕は強くなんてない。ただ、わかるだけ。自分の弱さを自覚しているから、支えを知つていてるから寄りかからず立つていられるだけ。それだけに過ぎないんだよ」

五月雨は右手を冥へと差し出した。五月雨にとつての支えは泉里なのか、それとも他の誰かなのか。

冥は迷いを振り切り、五月雨の手を力強く取つた。それと同時に五月雨は腕を引き、自然と冥は五月雨に抱き込まれる体勢となつた。ちょうど先程まで樹里がいた場所だつた。

冥はしばらく何が起きたか理解できなかつたが、伝わる温度が気付かせた。決して不愉快ではない接触だつた。しかし抵抗する気はあり、冥は腕から抜け出そうとしたが、思いのほか力は強く、少しも姿勢は変わらなかつた。上から樹音が冥の肩を押したこともあり、冥は抵抗を諦めた。

「あなたは不安を抱え込みすぎているのね。だけど心は濁つていなから。だから不可視になることなんてないし、音は澄み続ける」

樹里の言葉は理解するより早く頭に入つて、冥は軽い睡魔に襲わ

れた。張り詰めていた気が緩む。音は脳に響き、酔わせた。  
そして包まれていてる体温は自分の体温に似ていた。こんなにも近  
すぎる存在が厭わしくないことに、冥は違和感と共に充実感を味わ  
つた。機械では埋まらない隙間は、人にしか埋めることは出来ない。  
「視覚なんて簡単に騙せるハズだ…」

「お世話になりました」

「どういたしまして。また機会があつたら来てね」

樹里と泉里は笑みを交わした。眞と五月雨を残し、樹里と樹音はそつと部屋を抜け出して、隣の部屋で待機していた泉里と薬剤師の歩と共にリビングへ移動した。

泉里と樹里の様子を隣で見ていた樹音は、歩にそつと耳打ちした。

「泉里と樹里つて仲良かつた？」

「気は合つみたいですよ。良かつたですね、戻つてこられて」

歩の言葉に樹音はうん、と嬉しそうに笑つた。

樹里は『プログラムの影響』を受けるのが遅かつた分、強く障害が出てしまつた。樹音に先に障害が出たため、『プログラムの影響』を受けることの予想は出来ていたが、潜伏期間が思つたよりも長かつた。

「大切なことに気付かないと『同一視』と同じだから。でも『特別視』は限定に似て非なるものだしね。そう、限定するなら『有在視』。存在認識が一番の特別だから」

泉里の咳きに、二人は頷いた。泉里が言つた『有在視』という単語は実際にはないが、音を司る一人には理解できる。『存在する、有る』といふことを認識して視ること』が大切だつた。

「五月雨は気付いたね。それはあの人気が望んだことだから仕方ないけど…そもそも僕もばれるかな」

泉里の言葉は隣の部屋に向けられた。

\*

五月雨に支えられて眠る冥。五月雨にも自然と優しい表情が浮かんでいて、まるで親子のように見えた。それは強ち間違つていなかろう。

マジックミラーの壁は泉里にとって意味を成さず、五月雨の状態を心で感じていた。泉里の能力、『心理現視』しんりつけんしはその人を見るだけで、その人の心がわかる。悪影響を受けることが多々あるが、俱楽部にいる間は感じなかつた。俱楽部に存在するのは部員の本質のみだけだつた。

樹音と樹里が帰り、一人きりとなつた部屋で歩は笑みを深め、薬剤師としての服から『時の司の長』としての簡素な黒いワンピースに着替えた。

時の属性は黒。永遠とも思える時間は自由でもあるが、戒めの単位だつた。限りがあるから、人はその中で希望を持つ。不老不死に存在意義がないからこそ、神は転生する。生まれ変わつてリセットする。それなのに、歩は死ぬことはなく、転生もなかつた。時の司の長となつたときから、生き続けている。

そんな歩の能力発動は笑みだつた。笑うことにより、心が安定する。顔の筋肉を利用することで指を鳴らすのと同様の効果があり、それ故に、歩は笑みを絶やさない。能力発動の仕種は癖になる。

泉里は他の長に洩れず、能力発動に指を鳴らした。

「歩、君が何を思つているか僕にはわからぬけど。『ソレ』を望んでもいいんじゃないかな」

「今は、自分がどう思つているのかさえわかりません。ただ、私は醜くなりたくないから。だから今までいいんです、『心の司の

長』」

黒一色の服装に着替えた泉里に向けた歩の言葉は吸収された。無くなつたのではなく、取り込まれた。決して部員には聞かせられない会話だつた。『世界の関係者』の存在を今、知られるわけにはいかなかつた。

心の属性は黒。永遠に広がる可能性は宇宙を示す黒。心に悪が占

める割合は高い。しかし、そこから始めるから白は際立つ。優しさが嬉しいのは、そこに白が存在するからだ。

「あの『音の司の長』の姉妹が来たのはあの人望んだことだけれど…君に何か伝えたかったのかな」

「…どうでしょう。あの人は直接教えてはくれませんから。でも、これで良かったんです」

「良かつた、ね」

泉里の囁く声はどうしようもなく甘く、歩は自然に笑みを優しいものへ変えた。

あの人望み。それは救いであり、擁護だ。この出会いは意味があるはずだった。

「ところで、冥をあの場所に置いた本当の理由は何だったのですか？」

「本当の理由…簡単なことなんだけどね。冥も零も間違つてはいいないんだけど、もっと簡単に考えればいいんだよ。看視が目的ではなく、五月雨には冥が必要だった、ということなんだけど」

一人の様子を見て、歩は頷いた。同調しても不愉快ではなく、不愉快なんて感じないほどに近づぎている五月雨と冥は、メンタルシンクオ率が高すぎた。だからこそその存在。三ヶ月も側にいることが出来るのは支えが冥であることを示していた。そして冥に惹かれる理由はただ一つ。それ以外、の選択肢がなかつただけだ。

「誰が一番早く自分が『心の司』だって気付くんだろうね」

サイコロジー俱楽部はただの俱楽部ではない。

## 隠れた出逢い

『』にでもある学ランが、まるで聖職者の服に見えた。

「大丈夫ですか？」

運悪く不良にからまれていたところで冥は助けられた。三人相手に軽々と攻撃をかわし、少年は一撃で倒していった。人体の急所を突いている。振り返った少年の学ランには近所の中学の校章がついていた。

冥が呆然として言葉を返せないと、少年は心配して駆け寄つてきた。

「どこか怪我でも？」

「いや、全然。ありがとう」

少年は安心して笑みを浮かべた。

冥は不思議に感じた。年下に助けられても感謝以外の気持ちはなく、心配されて近くなつた距離に嫌悪感もない。

それはまるで、あの部員達のようだ。

「どうして助けてくれたの？」

冥は少年の目を見た。動じることなく、揺らぐことなく笑みへと細められる瞳。本当の優しさとはこれかもしれない。

冥は張り詰めていた気が緩んだのを感じた。

「自分ができることだからです。それに、人を裏切りたくないですから」

少年はそれだけを言つと背を向けて歩き出した。まだ聞きたいことがあるが、どれも引き止める理由にはならなかつた。

冥は考えずに声を出した。

「君の名前は？」

思わず出た質問だつたが、一番ふさわしかつた。少年は足を止め、ゆっくりと振り返つた。少しあにかんだ表情が印象的だつた。

「須賀由宇です」

## 隠れた出逢い（後書き）

眞と由希はいろんな風に出来つてこました。

## 第2話・言語誘導（前書き）

「十夜」は、世界の関係者の十夜ではありません。  
同じ名前の理由はまた別の話で。

もう、何も望みはしないように。

満月の夜に空気が澄んでいた。少し熱気を含んできたようを感じる。季節は夏に近い。街の喧騒、人の雑念はそこそこに散らばっていて、無秩序だった。

それは何も干渉されない世界のようだ。

孤独を表面化させたような幻覚を感じた。

一人で外に出るのが好きだった。仲間と歩くのはもちろん好きだが、仲間以外の大多数とでは一人でいるのを好んでいた。限定を加えるなら夜、深夜ならなお良かつた。

そんなの、この力を考えると自然なことだけだ。

人気のない公園の側道を通り過ぎるとき、微妙に言い争う声が耳を掠めた。

「お前、何言つてんのかわかつてんのか？ 痛い目みてえのかよ！」  
こんな場所での騒ぎなんて、大体予想がつく。声のする方へ向かうと、一人対五人の構図が出来ていた。一人なのに、余裕で向かい合っているのが目を引いた。その人の後ろに怯えたように座り込んだ少年がいる。

余裕そうに立つ青年に声を荒げた男が、すぐに暴力に出ようとするのが典型的すぎて、思わず笑みが洩れた。こんな公園で犯罪を犯すくらいなのだから、とは思っていたが、ここまで予想通りだと呆れを通り越して可笑しくなつてしまつた。滑稽で、とてつもなく愚かだ。

そして、道化に見える。

「コイツを助けるつもりか？ コイツにそんな価値があると思つてんのかよ！ コイツは俺に金を渡すためだけに存在してんだよ。だ

から俺はコイツから金を受け取る。それでいいじゃねえか

「…ホント、救いようがないね。全然論理的じゃない。あと、僕にはこの人の価値なんてわからない。でも、あなたよりは低いとは思わない。単細胞な行為は止めといった方がいいよ、馬鹿に見えるから」間髪入れずに向かつてきました拳に、青年はカウンターで対処した。流れるような動きで拳を避け、背後に回つて首に手刀を入れて地面に落とした。

月光に淡い茶色の髪が映える。

「ちゃんと見ててね」

僕の存在にいつから気付いていたのか、一瞬視線を寄越して、次の動作に入った。

二人同時に向かつてくるのに対し、一人の拳を受け止め、そのまま腕を引いて体勢を崩させ、その反動でもう一人に回し蹴りを加えた。足が綺麗に脇腹に入っている。

呻き声が聞こえる。負けた者はどこまでも落ちて、墮ちていく。青年は軽い動作で腕を払い、残った一人を一瞥した。動く度に裾がはためく。後ろからわかるのは中国系の服だということだけだった。

「次は手加減しないから。こんな馬鹿なこと、早くやめなよ」

二人は倒れている三人を残して逃げていった。男たちがこちらに向かつてくるかもしさないと、一応構えていた姿勢を解除した。簡単に仲間だと言うくせに、肝心なときには裏切る。自分が大切で、他の人なんてどうなつても良いと思つていて、薄っぺらい人間関係だった。

被害者は一つの間にかいなくなつていて、青年がそう仕向けたのだと気付いた。自分に注意を向けさせて、逃げる隙を作っていた。人を助けるのに慣れているのかもしれない。

青年はくるりと振り返った。顔は、見ただけでは性別がわからなかつた。

肩に届きそうな長さの髪。男女のどちらにも見える顔。どちらか

ところと女性のよりも見えたが、感じるのは男性の雰囲気だった。容姿は綺麗で、いつも周りにいる美形と比べても劣らないくらいだ。

本当にこの人は。

「これからどうする？ 警察を呼ばれても困るし。面倒が嫌ならこの場を離れた方が良いと思つけど」

「え？ あ、そうですね」

「途中まで一緒に行こうか」

「…はい」

思わず頷いていた。あれだけ人と関わるのを避けていたのに、無意識の返事は肯定だつた。本能が、何かを感じ取つていて。

あと一回。あと一回で青年の心理がわかる。

『能力』を発動するには『会話の三往復』が必要だつた。この能力で辛い目に遭つてきたのに、今は好奇心が勝つていて。

こんな風に心を知るのは反則だつてわかつてはいるけど、止められなかつた。それほどまでに、惹かれていた。どうしようもなく、心が変化していく。

今だけは、許されてもいいはずだ。

公園を抜け、先を歩く青年に声をかけた。

「あの…名前は？ 僕はみず…雨水です

「僕はキサラつて呼ばれてる。本名は如月十夜きさらぎとうやつていうんだけど…」

君ならないや。十夜でいいよ。あと、敬語はいらない。同じ年くらいじゃない？」

微笑を浮かべた十夜に、返事ができなかつた。

言葉と共にやつとわかつた心理。眩暈がしそうだつた。

心までがこんなにも安定していて強い人なんて、今まで一度しか会つたことがなかつた。一番信頼している、僕を救つてくれた泉里。十夜は泉里と同等、しかし性質が違う心の強さを持っている。自分の本当の名前を言つたことは間違いじゃなかつたと思えた。この人の前ではなるべく嘘は言いたくなかった。

この存在は確実に自分の中で大きくなり始めていた。

十夜は公設のグラウンドに入り、ベンチへ向かつた。

「なんで僕に声を掛けたの？ 見て見ぬふりするかもしれないのに」「逃げない人だと思ったから。最悪、アイツらが君に向かつたとしても、君なら対処できそうだと思つたし。対処できるように構えてたよね」

あの場でそこまでわかるのは仲間か、それとも観察力に優れるのか。前者ではありえないことはわかっている。それは初めからわかつっていた。仲間は間違えない。後者だとしても、交戦している状態でそれを考える余裕があるのが凄い。

「ありがとう」

「そう、良かった。ただの自己満足にならなくて」

予想できない言葉に耳を疑つた。相手の心理を知れている今、予想できないことはないはずで。しかし思つてもいなかつた言葉が現実に出てている。心理と行動は繋がつているはずだ。

『言語誘導』。僕のこの能力は、会話三往復で相手の心理がわかる。既にそれは発動している。そして、今まで間違いなんてなかつた。ということは、これは間違いではない。

それなら、考えられることは一つ。何万人かに一人はいる、自分の能力が通じない相手。心の状態や雰囲気は感じられるが、考えていることはわからなかつた。

十夜は泉里と同様、不確定要素だった。

「自己満足、ね。それは僕が助けようと思ったことも入るかな」

「それは優しさだ。見返りを求める助けは」

十夜は薄く笑い、ベンチの横にある自動販売機に向かつた。ネオンの光が十夜を輝かせる。人工的な光なのに、十夜を一層際立させていた。何度か雰囲気が泉里と重なるが、同じではない。

『不確定要素』だからかもしれない。十夜の内面に興味があつた。十夜はレモンティーの缶を差し出した。

「これでいい？」

「…ありがとう」

その缶に、温かさと冷たさを感じた。温かさは十夜の優しさから、冷たさは十夜の心を読んでいるという罪悪感から。治療以外ではなるべく使わないようにしていった能力を、ただ的好奇心で発動させている。

それは全てを裏切つているようで。

ベンチの背に軽く腰をかけた姿勢でコーヒーを飲んでいた十夜の前に立つた。

今でも計算が働いていた。ここで十夜に嫌われても、僕には泉里と仲間がいる。失うモノは小さい。

「…」めん。今更言つのは卑怯だけど、僕は相手の心がわかるんだ。気持ち悪いよね？ 嫌だよね？ だから

「…心がわかる？ 何考えているかわかるってこと？」

「あなたに対しては詳しくはわからないけど、今は少し動搖しているつて大まかな感じでわかる」

「ああ、そういうこと。なんか変だと思つてた。気配を感じるんだ。君が近くに、すごく近くにいる感じがしてた。そうか、読心みたいなものか」

遮られた言葉に続くのは妙に納得したような十夜の声で、思わず十夜の顔を凝視してしまった。十夜は首を傾げて不思議そうに見返す。

「」の瞳に囚われるのはどうも心地が良かつた。この瞳だから惑つ。この手の瞳には昔から弱かつた。  
だから、もう。

「なんで…嫌だと思わないの？ 心を覗かれてるんだよ？」

「詳しく述べわからないんだよね。それって鋭い人と同じじゃない？」

「…もう一度よく考えて。それでも僕の側にいれると思つたら。友達になれると思うなら」」に来て。」」が僕の居場所だから。… タイムリミットは明日の七時

小さな紙切れを渡した。そこに書かれているのは俱楽部の名前だ

けで、裏に即席の地図を書いた。簡潔で、充分にわかる。

十夜が来るかどうかは賭けだった。賭けに負けても何も失わないはずだった。ただ、心に隙間ができるだけ。

わかつていたんだ、このときから。

## 第2話・言語誘導（後書き）

十夜が声をかけたときはカウントされません。「余話」ではないためです。

## 基準の一つ

「何かいいことでもあった? 十夜」  
親友、悠里夏目<sup>ゆうり なつめ</sup>の声に十夜は顔を上げた。向かい合わせに座っているため、自然と目が合つ。

十夜の机に広げられた課題の大半は終わっていた。解答欄は隙間なく埋められている。夏目は既に終わっていて、十夜の様子をじつと見ていた。不羈ではなく、優しい眼差しが十夜に向けられる。対等な立場にいるからこそその視線だった。

十夜は、休憩時間はいつも夏目と共に勉強していた。学校という場所は有効に使うのが二人のモットーで、課題は全て放課後までに済ませている。それは最も効率のいい休み時間の利用法で、教科書はいつも学校にしかなく、家に持ち帰るのは『自由な時間』だけにしていた。

「…夏目は、自分の心が他の人に聞こえるとしたらどうする? どう思う?」

「何、突然。うーん全てわかるのは嫌かも。筒抜けっていうのがね。フェアじゃない感じするし。でも好きな人ならいいかもね。嫌な部分が聞こえるのは勘弁してほしいけど、それ以上に好きという気持ちを伝えられると思うから」

夏目の言葉に十夜は考えこんだ。無言の時が過ぎる。十夜のいつになく真剣な表情に、夏目の口元は緩んだ。

夏目は机に広がるプリントの残り数個の解答欄を、逆の方向にも関わらず綺麗に埋めていった。それは甘やかしではなく、優しさだった。

価値のあるのは数学の問題ではなく自分が提起した問題で、答えは自分にしか求められない。今はそれを解くのが最重要課題だった。

「キサラ先輩に好きな人ができるんですか! ?」

「良かつたわねーホント。あんたに好かれた人ってどんなの?」

突然現れた一人に、夏目は間髪入れず教科書を丸めて叩いた。柔らかい音が二人の声に重なる。音以上に衝撃があるようにしたのは、手加減をしなかつたからだった。

「悠里先輩、ひどいですよう」「う

ふわふわの明るい茶色の髪を押さえながら、樋口由希<sup>ひぐち ゆき</sup>は上目使いに夏目の顔を睨んだ。子犬のような小動物の雰囲気を漂わせている。しかし、大きな瞳から窺えるのは強い意志だった。にも関わらず、周りではクラスメート達が可愛いなどとはやしていた。由希の動作は、本質をわかつていない人には可愛く見えるのは当然だった。

もちろん、夏目は由希の本質を理解していた。

夏目は由希のそんな仕種に、につこりと笑顔を返した。笑顔に含まれた意味は「静かにしようね」。由希は撫然とした表情を浮かべたものの、大人しく口を噤んだ。

由希は夏目に勝てなかつた。上級生だからという理由だけではない、確かな差がある。

「何するの！ ホーラン！ 悠里つてキサラ麤膚。<sup>せんじょうの</sup>そんなんだから誤解されるのよ」

軽くウェーブがかかつた黒髪をかき上げ、千条留美<sup>せんじょうみ</sup>は夏目を軽く睨んだ。

友人としての気軽さがそこには現れていた。留美の、美人と称される容姿は確かに整つていて、人の目を惹き付ける。女性らしさを十分に表現した挙動は優雅ともいえ、日々の努力はそこには見えなかつた。いつも自然とお嬢様を演じてゐる。それが、他人に求められている自分の像だと理解してゐるからだつた。

しかし、気の許せる人物の前では維持する必要はなく、夏目や十夜の前では素の、気の強い留美になつていた。

「…好き、なのかな」

そんな中、ぽつりと呴いた十夜に夏目は微笑し、留美は意外そうに十夜を見た。そして由希は身の乗り出し、十夜の前に手を置いた。バンツという音と共に振動が伝わる。

「誰ですか！ 好きな人って」

「由希、黙つて。十夜、君が出した答えだから何も言わない。でもその基準、教えてくれるかな」

夏目が答えを促すような質問に、十夜は少し迷った後、はつきりと言つた。

「…名前で呼ばれてもいいと思ったから」「たつたそれだけが、十夜の中での重大要素だつた。

\*

「あと十分…」

時計の針を気にするなんて何年振りだろう。

遠い昔の癖だった。秒針が動く度に心臓が締め付けられる。鼓動は単調に、しかしながら確実に時と共に刻まれていった。

「約束の時間？ 期待するなんて、そこまで入れ込んでるの？」

五月雨は夕食の準備をしながらクスリを笑い、前を通り過ぎていった。皿の擦れる音が微かに聞こえた。

刻々と進み、近づいていくタイムリミット。夕食の良い香りも、今は何も感じなかつた。

## タイムマッチ

「… 夏田」

ポツリと呟いた十夜の声は、行き場を失わなかつた。

開かれる扉。差し込む月光。十夜は思わず溜息を吐いた。薬の影響はもうほとんど残つてはいない。ただ、手首に食い込む紐が擦れて痛かつた。

夏目は素早く十夜の前に膝を着いた。

「遅くなつてごめん。… まさかここまでするとは」

十夜の縛られた手首に絡まる紐を解きながら、夏目は呆れたように小さく舌打ちした。

声に滲むのは悲嘆の感情だつた。それは十夜以外にも向けられている。ここまで思いに気付かなかつたのはこちらのミスで。危険信号を発していたのはいつからなのか、十夜には今ではわかつていた。

「間に合わなくとも、行くよね」

十夜は自由になつた手を軽く振り、痛覚を振り切つた。鈍い痛みは気にはならなかつた。それだけ気持ちちは先回りしている。

夏目の問いかけに、十夜は微笑を返した。それは感謝の気持ちがこもつている、純粹な笑顔だつた。

「もちろん」

\*

時計の針はもう八時を差していた。自然と溜息が出る。

一時間前から諦めていた。希望なんてない。しかし胸に燻ぶつている光は消えそうもなく、どうしようもなく。食後の紅茶が喉を通過していく感触が気持ちを安定させた。

何気なく見た窓の外に広がる闇が、昨日の出来事を嫌でも思い出

させて。

鳴らされたチャイムは聽覚に引っ掛けられなかつた。

\*

「雨水……！」

玄関から微かに聞こえた声に、雨水は駆け出していた。いつまでも耳から離れなかつた声。近くに感じる気配。もう五感は確実に十夜を捉えていた。間違はずがない。五感が十夜を捕らえていた。

「なんで……」

今頃、という言葉は、雨水の口からは出なかつた。現れた十夜の格好は異常ともいえるもので、玄関に出た五月雨は呆然と立ち尽くしていた。上の二つのボタンが外れた、薄汚れたシャツ。走ってきたからなのか、額に汗が浮かび、十夜は髪をかき上げていた。

その中で生々しく映るのは、手首にはつきりと残る縛られた痕だつた。雨水には内出血が痛々しく見えた。一番酷く見える箇所から目が離せない。

「早く手当てを」

「それより！」

五月雨の差し出した手を見ずに、十夜は苦しそうに言葉を紡いだ。五月雨は安心させるように、そつと肩を抱いた。五月雨の手から伝わるのはただの優しさだけで、十夜は張り詰めていた気を緩ませた。ここで気を張って警戒しても意味はない。ここに危険など存在してはいない。五月雨の仕種はそう伝えた。

十夜はそれを感じ取り、息を吸つて呼吸を整え、いつもと変わらない澄んだ声を発した。

「僕を信じることはできる……？」

十夜の言葉に雨水はビクッと体を震わせ、目を伏せた。雨水は自分が中に残る灯火は決して消えないことはわかりきっていたが、決心などつけることはできなかつた。

遅れた時間の空白は嫌でも昔を思い出せた。この状態で何も答えは導き出せなかつた。

雨水は静かに足をリビングへと進めた。

「…とにかく手当てを」

五月雨は十夜の肩を抱いたまま、雨水の後に続いた。前を歩く雨水の背中に刺さるのは、十夜の強い視線で。十夜の乱れた学生服の理由など、雨水と五月雨にはすでにわかっていた。

だからこそ、二人は何も言わなかつた。

「まずその手首から…」

「どうしたら信じてもらえる?」

五月雨の腕からそつと抜け出し、十夜はじっと雨水を見た。含わない視線は一人の状態を表していて、五月雨は思わず深く息を吐いた。

そこには以前までの眞と自分のように見えて、自分には何もできないことがわかつていた。

「何ができる?」

雨水らしくない、冷たい言葉だつた。五月雨は十夜から離れ、雨水の腕を取り、抱きしめた。

精神が不安定な雨水は人形のように自分を取り繕つていて、五月雨はとてもこれ以上見ていられなかつた。自然と重なる過去の出逢つた頃の雨水。こんな雨水を十夜には見せたくなかつた。

雨水の言葉に十夜はゆっくりと目を閉じた。そしておもむろに側にあつた果物ナイフを手にして、刃を自分に向けていた。

軽く引いた刃から零れる、髪の毛。ザツと音がするたびに十夜の髪は切られていつた。

「十夜!」

「…血を流すのは君を傷つけるだけだとわかっているから、だから今はこれくらいしかできない」

床に散らばる髪は止まることなく増え続け、比例して短くなつていく十夜の髪。それは神聖な儀式のようにも思えて、雨水は五月雨

の肩越しに十夜を見、無意識に涙を流していた。

溢れるのは思いと、それと。

「わかつたから！ わかつてるから…」

雨水の脳に流れ込んでくるのは十夜の真摯な感情で、伝わるのは

五月雨の体温と鼓動で。

雨水は気が抜け、五月雨の腕にしがみ付いた。自分では立っていない。されない。

「はい、ストップ」

十夜の動きを止めたのは、雨水の言葉と泉里の手だった。十夜の腕はしつかりと泉里に受け止められていた。

簡単に振り解ける力加減の拘束で、しかし十夜は振り解こうとはしなかった。それは諦めではなく、当然の結果だった。これ以上の行動に意味はない。

泉里は空いている手で十夜の髪を梳き、微笑んだ。その表情が示すのは安心だけで、十夜も微笑を返した。

「君もよくここまでやれたね。その強さが救いになつたかな… ありがとう。さ、ここからは僕の出番だね」

泉里はここにここまで笑つたまま、十夜の腕を引いた。導いていく先には治療室があった。主に外科専門としての薬品や器具が置いてある。開けられた扉から消毒薬の臭いが漂つた。

五月雨は、泉里と十夜が部屋に入ったのを確かめ、ほつと息を吐いた。腕の中にはまだ縋り付いたままの雨水がいる。そつと背中を擦ると、規則正しい呼吸が聞こえた。

もう、雨水は戻っていた。いつもの雨水。俱楽部に来て、部員になつてからの雨水だった。

五月雨は、過去の雨水は雨水ではないと思ったかった。自分の能力を嫌悪し、棘のある言葉で周りを傷付け、自身も傷付いていた。しかし、雨水の能力は部員の中でも唯一のもので、皆が救われている。

支えられているのは互いに同じで。

「雨水？」

「五月雨…僕つて冥なのかな」

「いや、僕だと思うよ？」

「そうだね、と微かに笑った雨水はいつもの雨水で、五月雨は勢いよく雨水の体を押した。しつかりと立つ雨水。もう完全に体は回復していた。それを見抜けないはずはない、仲間だった。

冥は傷付きたくないから人と関わりたくないと思つているが、一旦相手に心を許すと絶対的に信用する。一方、五月雨は当たり障り無く接するが、特別な人は限られている。そして、いつも裏切りを恐れている。

始まりが怖いか、終わりが怖いか。

「…ほら、こんなトコロとか」

五月雨は涙で濡れた肩を一瞥し、雨水に笑いかけた。

弱くはない。強くもないけど、立ち直りは早かつた。順応するのが得意なのは、能力を持つ者の性だった。

人を理解しすぎると、自分を見失いかねない。割り切りはしつかり出来ていた。

「ああ、説明してもらおうか。僕には君に何が起ったのかわかつてないけど、君の口から聞かない意味がない。わかるよね？」

泉里のその言葉に十夜は頷いた。

治療室から出てきた泉里と十夜はリビングのソファーに向かい合わせに座り、五月雨は泉里の、雨水は十夜の隣へと座つた。

十夜の髪は泉里によつて切り揃えられ、今は男にしか見えなかつた。制服は軽く埃が残るもの、しっかりと着こなされていた。

そして、十夜の手首に巻き付けられた包帯は十夜の白い肌に映え、雨水に下に隠された内出血を思い出させた。その雨水の視線に気付いた泉里は、ティーカップに紅茶を注いだ。ダージリンの香りが辺りに漂つた。

皆の意識は十夜の声にだけ向けられていた。

「結論は出でていたんだ。もう昨日から迷いはなかつた。でもはつきりと氣付いたのは今日、友達と話していた時に。そこに由希つていう後輩もいて、聞かれてたんだ。結論を。由希は僕が一度助けたことがあって、それからずっと休み時間になると教室に来ていたんだ。慕つてくれてたのかな。今日も来でいて……僕が雨水のことが好きだつて氣付いたときに零した言葉を聴いたんだ。好きっていうのは、名前で呼べてもいいと思つたから。僕を名前で呼んでいるのは、いつも一緒にいる友人だけだからね。それでそこでは何もなかつたんだけど……」

一度言葉を切つて、十夜は息を吐いた。

甦る、光景。それは今では一つ一つの理由がわかつて、由希の気持ちが痛かつた。傷つけたのは自分だと理解できるからこそ、十夜は由希に対しても憎しみも何も、負の感情は持たなかつた。

「放課後、帰りの用意をしていたところに由希が来て……薬品を嗅がされた。……クロロホルムっていうのかな。それで意識がなくなつて、

氣付いたら倉庫代わりに使われている空き教室にいた。手首は紐で縛られていて。目の前には由希が立つていて、何て言つたかな…。

『キサラ先輩は渡さない…あなたは僕の』だったかな。それから手を伸ばしてきて、シャツのボタンを一つ外した。…見えたかどうかわからぬけど、鎖骨付近に傷があるんだ。由希を助けたときの付いた傷なんだけど。それを確かめた後、『味方ですよね』って言ったから、頷いた。『それなら行かないでください』って言われて『それはできない』って返したら、また薬品嗅がされて、氣付いたら時間は過ぎてた。それから友人が助けに来てくれて、今ここにいる「十夜は自然と、右手を鎖骨に当てていた。はつきりと示された傷痕。それは小さく、目立たないが、確実に残っていた。

傷痕が残るのは由希の望みなら。それなら甘んじて受けよう。十夜はもう、後悔はしたくなかった。

「…よくわかつたよ。辛いのに言わせてごめん。でも、これで前に進めるよね？」

泉里の言葉は的を射ていて、十夜はふわっと笑った。言葉にすればするほど想いは形になつていって、認識すればするほどこれからどうするべきかが見えてきた。

十夜の笑顔に五月雨と雨水は固まってしまい、泉里は柔らかい笑顔を返した。

整つた顔は素直に綺麗と思えるもので。

心を伴う美しさは甘美で麻酔効果があつた。

「僕は泉里。この俱楽部の部長で、医者だよ。また遊びにあいで」

「僕は五月雨。よろしくね」

泉里の自己紹介に遅れを取らず、五月雨は言葉を継いだ。本当の名前を名乗ったのは十夜に対しての礼儀だった。

初めから患者ではなかつた。それなら、純粹なただの友人から始められる。一人目の、友人。この場にいないうれや水無瀬もきっと十夜を気に入るだろう、と泉里は確信していた。それは予想ではなく、予言だった。

確定している未来は推定未来ではなく。しかし推定からの変化ではあつた。

「僕は如月十夜。十夜でいいよ」

「済みません…。もう…近付きません」  
由希は俯き、消えそうな声で呟いた。自分の行為を責めているのが、はつきりと感じられる、不安定に揺れる声だった。

放課後の教室。断絶された空間のように、周りの音は切り離されていた。三人の息遣いさえ聞こえそうな静寂の中、十夜は椅子に座り、隣には当然のように夏目が机に腰を掛けていた。

そして、十夜の前に立つ由希。

十夜はふう、と大きく溜息を吐いた。そして腕をゆっくり組んだ。由希の視線が腕に集中した。まだ取れない包帯。下に残る痕を見せるのは由希に重い心理負担を強いことになるだろう、と夏目と相談しての結果だった。しかし、包帯も手に痛い。

由希は十夜の溜息に体を震わせ、一步下がろうとした。足が後ろに着く前に、十夜はしっかりと由希の腕を取った。細く、しかしながら筋肉が程よくついた腕。また震えたことが、なんだ手から伝わった。

「由希、言いたいことはそれだけ？ 離れたいの？ 僕から。もう嫌いになった？」

「まさか！ 好きです！ …でも、どんなに好きでも、あんなことをした僕がここにいることなんて」

「できないって君が決めるんだ？」

?まれた腕を振り解こうともせずに、由希は被さつた夏目の言葉に口を噤んだ。

由希は、決定権は自分にないことはよくわかつていた。だからどんな罰でも受けるつもりだった。恩を仇で返した罪は重く、十夜の手から伝わる温もりは、由希にとっての最後の幸せだった。

ただ、夏目の声に非難が含まれていながら救いだつた。

「できるできないは僕の選択だよ。由希、僕は君を」

由希はきつと目を閉じた。最終宣告だった。それは決して良いものではないことは予想できた。それを十夜の口から聞くことになるなんて。由希の体は硬くなるばかりだった。

「責めてはいない。こうなったのは君のせいではないから。気付かなかつた僕の、僕と夏田のせいだ。それを君に責任転嫁するのは愚かだからね」

由希が驚愕で目を開けた時、十夜はふっと笑つた。明らかに由希が悪いのに、十夜は自分の非をして受け止めていた。

由希は泣きそうに顔を歪め、十夜に抱きついた。？まれた腕をすつと振り解き、両手を十夜の首に回して体重を掛けた。十夜は突然の由希の行動に驚きもせず、小さい子をあやすように背中を撫でた。夏目はそつと十夜に目配せし、良かつたね、と口を動かした。

「だけど」

十夜の続く言葉に、由希は身構えた。しかし首に回した腕はしつかりと十夜を捕まえていて、十夜は薄く笑つた。

「だけど、僕を名前で呼べるのはまだ先だから。それがこの腕の痕に対する罰だよ」

「…ありがとうございます」

軽すぎる罰を由希は受け入れた。

特別でなくともよかつた。ただ側にいれるだけで由希にとつては幸せだった。十夜は由希の涙が止まるまで、由希の腕を解こうとした。

そのとき、夏目が微かに呟いた。擦れて聞き取り難い言葉が、誰の耳にも入らず消えた。

「泉里…そこにいたんだね」

思い出すのは、あの時のこと。

「十夜、そういえばそろそろテストがあるんじゃないの？」  
「あるよ。それが？」

「勉強しなくていいの？　ここに来てる場合じゃないとか」  
「僕がへマすると思う？　勉強は学校でしてるから大丈夫。…由希達に邪魔されないとモツといいんだけど」

雨水は十夜の溜息に同情し、苦笑した。

雨水にとって十夜は患者ではなく、純粋に友人と言える存在だった。同調する感情は不快ではなく、今だからこそ五月雨と冥の関係が理解できるはずだ。

能力を感じさせない、自然と付き合える関係。それを望んでいたことに気付けたのは雨水にとっての一番の幸せだろう。

その一人の会話を雨水の隣で聞いていた。思わず笑みが漏れる。丁寧に紅茶を入れ、二人に勧めた。爽やかな香りが部屋に漂う。その香りに誘われて、脳裏に微かに昔の思い出が過ぎった。ちょうど二人の様子があの時と重なる。

もういないのに、と何度も消えない感情。

…忘れるつもりもないけど。

「あ、誰か来たみたい」

雨水の声にはっと我に返った。彼のことを考へるといつも無防備になる自分を自覚していた。だからこそ、極力人前では考へないようになっていた。

沈んでいく思考が行き着く先は、どうしようもないほどに悪い結末で。それはもう既に起こってしまったことだった。

後戻りはできないし、望んでもいない。

もう一度チャイムが鳴ったところで、雨水が玄関の扉を開ける音

が聞こえた。ゆっくりと雨水の後を追いかけた。

「はい、どちらまで…」

「ここがサイコロジー倶楽部?」

「そうですけど…何か御用ですか?」

「んー患者じやないんだけどね」

雨水は不思議と警戒心を持つていなかつた。本能で感じる質が目の前にいる人物に危険信号を発していなかつた。

そんな雨水の反応が不思議だつた。

「どうしたの?」

雨水の横に立つた。

夕日に輝く髪ははつきりとわかる黒い色。逆光にも関わらず、強い光を持つ深い茶色の瞳。姿はかっこいいと称してもよいであろうと思えるモノだつた。全体の雰囲気が安定している。

「どちらさまでしようか?」

「泉里? 泉里だよね。久しぶり、会いに来たよ」

伸ばされる手は見たことがない手で、目の前に立つ人物は見たこともない人物で、しかし感じる気配は知つていてるモノだつた。

『泉里』と呼ぶのは部員と世界の関係者と限られた友人くらいで。

『泉里』という名前を知つているのは、あと一人。

「夏目…?」

「当たり。この格好でわかるなんてさすがだね」

「夏目?」

聞き覚えのある声に、十夜は部屋から顔を出した。十夜から『親友の夏目』のことは聞いていた。十夜を名前で呼べる人物の一人だ。まさか、あの『夏目』だつたとは。

「十夜。もしかしたらとは思つていたけどね。まあ詳しいことは後から話したほうがいいかな」

ね?と笑いかける夏目に、差し出された手を引いた。夏目は自然と腕の中に納まる。

その一瞬の出来事に、雨水は首を傾げ、十夜は苦笑した。

十夜から瞬時に伝わる記憶。十夜には夏田の考えがわかつていた。十夜が由希と対峙したとき、夏田の呟いた言葉はしっかりと十夜の耳に入っていた。

夏田は確かに『泉里』を知っていた。

「夏田……！」

「泉里、僕はここにいる。嘘じゃないよ」

強く抱きしめると、夏田は僕の背に腕を回し、軽く力を込めた。確実に伝わる想い。望んで止まなかつた、ただ一つの奇跡。十夜は呆れたように笑つた。僕の様子がいつもと違うのが新鮮なのだろう。

「夏田、君は僕の親友である前に、どんな人物だったのさ」

「あはは。一度死んだ、ってこと。そのままの意味でね。前の名前は真弓夏田。まあその辺のことは後で詳しく話すから……だから泉里、ゆっくり話そつ」

よしよし、と背を擦る夏田に「くん」と頷いた。素直になれた。無防備は、危険がなければ必要不可欠なものだつた。

夏田の前で、意地を張つても意味などない。

## 中学生の頃

「僕が話した方がいいかな。その方が泉里も辛くはないだろうし、僕がいる実感が湧くしね。じゃあ、僕が真<sup>正</sup>夏目だった時の話からね」

アッサムの香りが漂う中、夏目は物語を聴かせるように語った。  
それは辛い過去。しかし良い過去でもあった。終わりがこなればハッピーエンドの未来が約束された、過去。

夏目の隣に座り、手を繋いでいた。一度離れた手が、今ここに存在することを感じていたかつた。そして夏目はそれを当然のように受け入れていた。

「中学校に入学して、すぐの頃だつた」

\*

「生か死か、それが問題だ……どちらが気高いだ？」「

「ハムレット？ 君、新入生だよね？」

思わず声を掛けていた。学校の近くにある公園のベンチ。一人の少年が座つて黒く染まつていく空を眺めていた。淡い稻穂色の髪が色を失つていく。

それが綺麗だと目を引いて。ポツリと呟いた言葉はとてもよく似合つていて。

だからこそ、近くで見ていたいと思った。声を掛けるつもりなどなかつたのに。

「自殺願望があるわけじゃないね。生か死か。気高いのは生だよ。どんな事情があつても死は逃げだから。尊く、何ものにも代えることができないものだからこそ、自分の生を許さないと」

思いの外、声は通つた。遮る音がないせいだろう。少年は驚きの表情を浮かべた後、微笑んだ。くせつ毛の髪が軽く風になびく。

幼児たちの姿は既になく、閑静な住宅街が姿を現し始めていた。

今日は入学式ということもあり、生徒はほとんど学校には残っていない。通学路である公園の近くの道を通る者はいなかつた。

「君も新入生だね」

少年は新しい制服を見、判断した。まだ着こなせてはいない制服。それだけで新入生と判断することは容易かつた。だからこそ、初めから少年を新入生だと判断できた。

「僕は真弓夏田。皆には真弓って呼ばせてるけど…夏田でいいよ。なんかその方が君には合つから」

周りの人は名字が名前みたいで面白い、という理由から名字で呼びたがる。それが原因で、名前を特別なものだと思うようになつた。今まで、名前で呼ぶのを許したことはない。名前で呼ばれても返事をしなかつた。

しかし、少年には名前で呼ばれたかった。少年には夏田、と呼ぶのが合つていて思えた。真弓、の発音では違和感がある。これは主觀だけど、自分の名前だからこそ、名前に拘りがあるからこそ綺麗に呼んでほしかつた。

「僕は紗雲泉。さくもじゅみこれは通称。本当の名前は泉里つていうんだけど、絶対に呼ばせない名前なんだよ。その理由は言えないけどね、君には泉里つて呼んでほしい」

「なんで？」

「特別だから。見つけてくれたから。わかつてくれたから。それが理由じゃ、足りない？」

「まさか。よろしく、泉里」

握手を求めたのはどちらが先だったのか。月の光が降り注ぐ中、泉里は嬉しそうに笑つていた。

「泉…何かな、これは」

\*

「似合つてるよ、真弓」

頭から垂れ下がるリボンを引き、溜息を吐いた。泉里は片方のリボンを指で弄っている。くるくると回転する蒼いリボン。

「紗雲！ よくやつた。これで真弓がクラス代表に決定だな」ある一人の発言に、クラスメート達は賛同した。

もう諦めていた。足搔いたところで決定事項は変えられない。一番楽な役でもあるのだから、メリットはある。デメリットの方は考えたくなかつた。

「紗雲、お前のクラスの代表は？ 僕のクラスに協力してていいのか？」

「僕のクラスの代表は僕だよ。負けないからね？」

「紗雲が代表かー。いい勝負になりそうだ」

泉里は意地の悪い笑みを浮かべ、リボンを軽く引いた。簡単に解けていくリボンが弧を描く。

学校でのクラスは違つていたが、互いによく教室を行き来していた。クラスが違うことは何の障害にもならない。そして今のように、泉里は僕のクラスに馴染んでいた。クラスメイトがいる前では『泉』『真弓』と呼び合つ。どちらも、名前の印象を弱くしたかつたからだつた。

圧倒的に泉里のクラスが早く終わることが多いことより、僕を迎えるのが日課だった。放課後のホームルームの時間でも、担任とクラスメートは泉里の出入りを咎めようとはしなかつた。それだけ影響していたのは人望だけが関係していたわけではない。そのときから泉里は特別な何かを持つていた。

そんな放課後、泉里は教室に入ってきて、文化祭のイベントの一つである『クラス対抗男装・女装コンテスト』の代表者選任に参加していた。『クラス対抗』ということもあり、連帯責任のイベントだ。最下位のクラスは学校中をクラス全員で大掃除するというバツゲームがあり、メインイベントといつても過言ではなかつた。

男装の方は学年の中で綺麗と評判の少女に決定したが、女装の方

はなかなか決まらなかつた。泉里は何を思つたのか、胸のポケットからリボンを取り出し、油断していた僕の頭にリボンを巻きつけていった。

軽く纏められた髪。蒼が映えていて「すじく似合つている」という泉里にクラスメートは頷いた。

そして僕は晴れてクラス代表に決定した。

誰もこのとき、訪れるであろう未来が幸せではないとは知らなかつた。信じて疑わない、続くと思っていた日々。中学一年のあのときまでは。

## 終わりと始まり

「素顔のまま」でいるか、笑顔を強制するか。人間関係に摩擦はつきものなのに」

「それでも厄介事は避けたいという本音があるよね」

現代文の教科書に載っている小説の内容について、語り合いながら下校していた。通学路は途中まで一緒に、分かれ道までは話をしながら帰るのが日課だった。一キロの距離を歩くのが苦にならない時間を一人で過ごす。

通学路は交差点が多く、四方は壁に囲まれていた。少し眩暈と錯覚が起こりそうな道が続く。

泉里が先に角を曲がろうとしたその時、車の走ってくる音が聞こえた。重いエンジン音。アクセルを思いきり踏んでいるのがわかる。身体は自然と泉里より先に角を曲がっていた。

田の前に映るのは幼児。走ってくる車に気付かず、道路に小石を並べて遊んでいた。車のスピードは弱まつたが、それでも制限速度を軽く超えていた。

「危ない！」

幼児の腕を？み壁に寄せたが、反動で身体は道の方へと向かっていった。

迫る車。避けることは不可能だと感じた瞬間、身体は宙を舞つていた。自然と受身を取つたが、腹部に衝撃が残つていた。痛覚はなく、夢のように感じた。流れる血液が視界の端に映る。それはじわじわと地面を濡らしていった。血の占める面積が広がる。

「夏田！」

泉里の声が近くで聞こえた。田を開けると至近距離での泉里の顔。泉里の瞳には涙が浮かんでおり、零れ落ちそつだつた。

「泉里…泣かないで」

「夏田…」

「僕、のことは…いいから、あの子を、助けて…あげて。壁で、身体を打つた、かもしれない。僕が…護つた命、を助けてあげて。…

氣管が、潰れなくて、よかつた。こうやつて、最後まで話せる…」  
泉里はすぐに幼児に近寄り、身体を触つて確かめていた。大声で泣き叫ぶ幼児が心配だつた。強く腕を引きすぎたかもしれない。どこか怪我をしているかもしれない。

泉里は一通り診た後、戻ってきた。何かを確かめるように、そつと頭に手を置いた。

頭に添えられた手が優しくて、思わず笑みが零れた。

「あの子は大丈夫。君が護つたんだよ、夏目」

「良かつた…。痛覚…が、麻痺してゐる分、今は樂。こう、やつて死んで、いけるのつて、幸せ、なのかな。泉里、がいてくれて…良かった」

泉里の頬に一筋の涙が流れた。しかし、それ以上は流れなかつた。泣かないで、と言つた言葉を覚えてゐるのだろう。

誰かが悲しむ姿を見るのは嫌だつた。それが大切な人なら余計に。でも護りたいと思つた自分の心に嘘はなく、選択は間違つていたとは思わない。

これが運命なら喜んで受け入れよう。

「泉里、ありがとう。君の人生が君にとつて優しいものであるように」

意識はそこでなくなつた。

「僕の代わりになつてくれるので…」

「ありがとう」

黒髪の少年は嬉しそうに笑つた。初めて見る顔だつた。

「さて、僕は初めからスタートか。望んだことだからいいけどね。じゃあ、あとはよろしく」

笑顔のまま背を向け、少年は走つて行つた。かける言葉が見付からず、体も動かない。

数メートル先で、少年は消えた。

「転生だよ」

すぐ後ろから聞こえた声に、反射的に振り向いた。

何もない空間に現れた少年。今までいなかつたことは空氣でわかる。とても洗練された雰囲気を感じた。

「彼は次はまた初めから。同じ身体での転生を選ばなかつたんだよ。まあこの身体は君の次の転生に使われるからそれは必然的選択だけど」

「転生…」

「そう、生まれ変わり。君はまた十四歳から始まる。また大切な人に出逢うために。大切な人の支えになるために。ただ、名字と容姿が変わるからリスクは大きい。君の名前は悠里夏目。ゆうり なつめ。あの少年の苗字を受け継いでね。名前はそのまま。戸籍、その他の身近な情報は変えてあるから。これからどうするかは君次第だ」

少年は指を鳴らした。

何もなかつた空間は、見慣れない部屋へと変わっていた。

「それから悠里夏目になつて、十夜と出逢つたんだよ」長い物語は幕を下ろした。十夜との出逢いからはまたの機会にて、夏目は片目を瞑つた。

雨水は思わず聞き入つてしまつていて、身体が夏目の方へと乗り出していた。慌ててきちんと姿勢を正す雨水に夏目は笑みを返した。「時間的にいうと、夏目は泉里に逢つて、生まれ変わってから僕に逢つた。泉里は転生を知らずにアメリカで医師免許を取つていて、歩とそこで出逢つた。帰ってきてから五月雨たちに逢つた。順番はこうだつて言つてたよね？」それから、高校三年の年になつて、全員が出逢つた。なんか、これが運命といつものかな」

十夜の要約に、夏目と同時に頷いた。

間違いのないまとめだった。それは一つの道を示しているようである。運命なんて陳腐な言葉で表せない繋がりに思えて。しかしそれを表す言葉はそれしかなく。

これは神のシナリオなのかもしれない。

「思い出すのはいつも出逢いのことだよ。皆との出逢いは忘れない。それが自分にとって生きる意味に繋がるから」

夏目と繋いでいる手に力を込めた。今度は確かにある温もり。もう忘れてたくない。

雨水はその光景を微笑ましく見ていた。見られている方としては恥ずかしいものがある。

そんな雨水から伝わるのは、夏目は十夜に似ていると思つている気持ちだつた。確かに印象は似てゐるかもしれない。

十夜はそんな雨水を知つてか、夏目の空いている方の手を引き寄せた。

「十夜：嫉妬？ 違うよねー。僕は悠里夏目だよ。それ以外の何ものでもない」

「わかつてゐならない。今更、真弓夏目になられたといひでどうすることもできないから。後悔はしていないよね、二人とも」

先程と同じように、夏目と同時に頷いた。

悔やんだことはある。しかしそれだけではなく、後悔に縛られた  
りはしなかった。ちゃんと割り切っていた。今まで後には引きずつ  
ていない。それが二人の約束だった。

夏目は柔らかく、繋いでいた手を外し、十夜の首へと掛けた。顔  
は肩に置き、凭れ掛かる。

「転生して、最初に逢えたのが君で良かった。だから泉里も見付け  
られた。君のその高潔な性質が救つたものは大きいよ。既に影響し  
てる」

「そうだね。僕も十夜に救われた。君が雨水を救つてくれたから、  
僕も楽になつたんだよ。夏目を繋げたのも君だね。本当に、『名は  
体を表す』かな」

最後の言葉の意味を知る者はいなかつた。この場に歩がいたら、  
きっと微笑んでいたであろう言葉。

意味はわからなくともいい。自分がここにいる限り、十夜はあ  
人に出逢うであろうと予想していた。そして、あの人もそれを喜ぶ  
ことも。まだ、出逢いの連鎖は続いている。それは運命めいたもの  
で、それを運命とは呼ばない。

言葉で表す必要なんて、見出すことはできないモノがそこにはあ  
つた。

## 番外編・奇跡（前書き）

智哉は『紅に沈んだ言葉』に出てきます。  
出会いは由宇繫がりです。

奇跡は起らるんじゃなくて見つけるのだと。そう言つたのは、泉里だった。

「奇跡つて由宇のこと?」

「彼も含むけど、彼だけじゃない」

泉里の答えに首を傾げ、ちらりと智哉を見た。智哉は相変わらずの無表情で緑茶を飲んでいた。

無表情だけど興味はあるようで、関心を示しているのがなんとかわかる。

まだ、智哉の心はわからない。まあ、読もうとは思わないけど。

「そもそも、何で由宇は『奇跡』って言われるの?」

ずっとわからなかつた疑問に、智哉は同意するよつに泉里を見た。智哉も知らないらしい。

泉里は苦笑した。

「由宇はね、根本的に公平なんだよ。好き嫌いは後発的なもので」「なるほどね」

智哉は頷いた。智哉は、由宇のその性質を知つていた。そこに惹かれた要素がある、と以前言つていた。今まで『美形』という特別扱いを受けていたから、公平な由宇は特別扱いしなかつた。確かに、僕も特別扱いされなかつた。

でも、それだけではまだ納得できない。

「公平つてあり得ないんだよ。人は優劣をつけたがるから。比較して、自分を知るんだ。だから、公平な由宇は『奇跡』的な存在つてこと」

泉里の補足説明に、俯いた。

確かに人間は有利なのを好む。心が病むのは、それが原因になることが多い。

それを痛いほど知つてゐるから、今更ながらに由宇の本質が理解できた。由宇は他人と比較なんてしないで、自分を有利だとは思わないんだ。だからこそ、努力し続けていられるのかもしれない。

そんな由宇に、無意識に惹かれてはいたけど。

「奇跡は起くるんじやなくて、起こされるんだ。そして、それは見つけられて意味を持つ」

智哉の声は優しかった。由宇に出逢つたことを言つてゐるんだろう。

由宇に出逢えて、由宇を見つけて、智哉は奇跡だと思つたのかもしれない。

泉里は微笑して、智哉を見ていた。

「九死に一生、とかも、人の力だよ。自然の力に見えて、その時そのタイミングで起こすのは人なんだ。由宇は、それを起こす人だから『奇跡』と言える」

「由宇はタイミングが合つんだね」

やつと納得できた。出会うのだってタイミングは大切だった。

僕は五月雨と喧嘩したときに由宇に会つたから、由宇は何でも話せる友達になつていた。冥のように患者から始まらない関係は新鮮で、頼つていいところがある。

それが由宇が僕に起こした『奇跡』だつた。それを今、見つけた。「つまりはただの分類だよね。人によつて起こされではいるんだから。それを見つけて認識するかどうか、なだけで」

智哉はつまらなさそうに茶菓子を摘んだ。泉里は智哉の意見が合つてゐる、とでも言つよう領を、口を開いた。

「智哉にとつては面白くないだろうね。『みんな』の由宇になるから

泉里の嫌味な笑みに、智哉は苦笑を返した。それを隠すかのようにカップに口を付けた。

「十夜がいなかつたら、由宇が一番好きになつてたかも」

思わず出た呴きに、智哉は噎せた。緑茶が気管に入りそうになつ

たようで、涙が出ている。

呼吸を落ち着かせようとする智哉に、泉里は背中をさすりながら困ったように笑った。

「由宇は雨水が気に入っているからね。だから、さつきの発言は智哉を動搖させるのに十分だつたわけだ」

涙目の智哉をじっと見た。

由宇が僕を気に入っていても、由宇が選んだのは智哉だ。僕が由宇を一番好きになつても、由宇の一番は智哉なのに。

智哉の乱れた呼吸が可笑しかった。

「だから、それが奇跡なんだよね？ 僕が十夜の後に由宇と出逢つたのも」

「そうだね。由宇は確かに智哉を選んでいるんだよ。どのタイミングだらうと」

他の誰に好かれようと関係ない。由宇は智哉を選んだ。それにタイミングは関係ないと、泉里は言つ。

なら、一人の出会いは奇跡ではなく。定められているものは運命という言葉が一番合つているのだろう。

智哉はふつと口元を緩めた。

「君たちにそういう言われると、本当に運命だつて思えるね」「僕の言葉で良ければ、何度だって言つてあげる。

『奇跡』と呼ばれる由宇が選んだ特別。僕にとつての特別な友達になるような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0563d/>

---

サイコロジー倶楽部

2011年3月24日22時57分発行